

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎗木町 198-3
電話 (043) 485-1801

俳人香西照雄氏 ----- 宮武 孝吉 アメリカ芙蓉----- 清澤 瞳子
柿----- 中下 雪江 初体験----- 松坂みつえ

再会

林 千恵子

久しぶりに母に電話をした。元気な声が聞けて安心する。母は八十八歳。五年前に心筋梗塞で倒れ二カ月程入院したが順調に回復。その後、四年前の十二月に姉と一緒に郷里の島根から佐倉まで遊びに来てくれた折、「会ってみたい人がいる。」と急に言い出し、年賀状を交換するだけで疎遠になっていた千葉在住の知人に思い切って電話した。懐かしさもあって母の思わく通り会うことになった。六十年ぶりの再会だ。場所は江戸東京博物館のエスカレーターを上がったところの入口。たまたまその日、私たちはそこに行くことになっていた。その知人が私たちが都合に合わせてくれたのだ。母は電話の最後に「私は、緑色のハンカチを手を持っていきますから。」と言った。相手

の目印は黒い帽子だった。母はもちろん姉も私も、この映画にでもなりそうな六十年ぶりの再会にワクワクした。江戸東京博物館は以前にも行ったことはあったが、その記憶は今いちおぼろげだった。案の定、地下の駐車場からエレベーター、エスカレーターを乗り継いで入口に着くまでの間、所々見覚えのある景色はあったがほとんどが初めて見るようで、次第に不安が募っていった。果たしてちゃんと会えるだろうか。約束の時間になり、私たちは入口の前で黒い帽子の老人を待った。ところが黒い帽子は一向に現れず私の不安は的中した。姉と交代で下まで降りてみたり、母も落ち着かないのかじっとしておれずうるうるしだす。こうなると私の目は、黒い帽子を見つけるの

と母の姿を見失わないようにするので、にわかには忙しくなった。このようにして、私たちは不安に駆られながらの二時間をひたすら待ち続けた。二人が無事に再会したその瞬間を、私の目はあらゆる方向をさまよって見逃してしまった。気がついた時には二人は淡々と挨拶を交わして、思っていた程劇的なものでもなかったようだ。私たちは母の我儘につきあって、わざわざこのような不慣れな所まできて下さったこの知人に感謝せずにいられた。私が母のこの歳になった時、会いたいと思う旧友がいるかしらと思いを馳せてみた。年賀状を交換するだけのつきあいになってしまった旧友だ。もちろん相手も私もその時まで元気であることが前提だが、誰に会うことができるのか自分のことながら興味津々だ。楽しみにその日を待ちたい。

(編集委員)

俳人香西照雄氏

昭和時代の俳人に「香西照雄」という方がいる。大正六年生まれで香川県出身。東大ホトトギス会で中村草田男氏と出会い、のちに草田男が主宰した『万緑』の創刊に関わり活躍した。氏の作品は、昭和二十九年に角川書店から刊行された『昭和文学全集』第四十一巻『昭和俳句集』に収録されている。昭和の代表的な俳人の一人である。

実は氏は、私が高校二年の時の国語の先生である。先生は戦地ラバウルより生還して高松で教壇に立っていた。

授業はいわゆる教科書は使わず、題名は忘れたが芭蕉の作品の小冊子を、一年を通して少しずつ読み進めていく、というものであった。

私がいたクラスは男子が三分の一、しかもその大半は野球やサッカーなどの選手で、今と違って当時は、運動をしている生徒の多くは勉強に身

が入らない場合が多かった。

先生はどんな思いで私たちに芭蕉を教えていたのだろうか、と今になって思う。

しかし物静かでひょうひょうとした風情は親しみを感じさせるものがあり、生徒は皆先生に一目をおいていた。

ある日のこと先生は講義をやめて一番前の席にいた私のところに来て「宮武くん、ちよつと肩をもんでくれ」と言った。私は立ち上がって先生の肩もみをした。先生の自然なふるまいと、級友の笑顔が忘れられない。

先生は翌年、東京の高校に転じた。転じてもなお、文芸部誌に掲載する原稿を送ってくださった。私はその原稿を文芸部誌の巻頭に掲げた。

先生の作品を紹介する場合いろいろな選び方があると思うが、ここはこの文芸部誌に頂いた句から選ぼうと思う。「採点や水馬跳ね水輪三重」。

(上志津原 宮武 孝吉)

アメリカ芙蓉

八月のはじめ頃、道端や庭先でこの花に出会う。

見事な花。

この炎天下に堂々と開いて咲く花を見て、勇氣と元氣をもらう。アメリカ芙蓉だ。

午前の暑い盛りをやや敬遠し夕方から咲き出し翌日には終わりを告げる。

こんな大きな花、さぞ花も長く咲いているだろうと思うが、たった一日で萎む。もったいない花。

北海道育ちの私は、この花に出会ったことが無かった。

この夏はじめて出会ったのは、千葉へ出かける時、上志津原を過ぎ、高速の上の道のはじめての信号、右側の畑の隅で咲いていた。

「うわ！、でかい」。もう「大きい」表現では、はみ出してしまいう程「でかい」。

信号待ちの数秒の出会い。印象深い花に帰りにもと、午

後の夕方に近い時間に通る。

午前中の出会いは突然だったので、ただ「でかい」に興奮していたが、夕方はそれなりの心の準備で期待する。が、巨大な花びらは、巨大のまま萎んでいる。

二十センチ以上もある赤い花、遠くからでも巨大な花に気がつく。丈は二メートル程。花の直径は大きいものでは三十センチにもなる。早速図鑑で調べる。

「アメリカフヨウ」と判る。アオイ科の植物、ハイビスカスや花芙蓉・立葵・木槿なども親類だと言う。

しぼんだ親分花の隣には威勢のいい子分のつぼみが、長い剣先をそろえて開花の時を待っている。

毎日惜しみなくピンクや赤い花を咲かせる。たった一日の花の命を惜しむように精いっぱい咲いている。

(井野 清澤 瞳子)

柿

夏の終わりを惜しむ様なセミの大合唱の合間に、つくつく法師の声を聞きはじめると子供の頃を思い出す。生家の裏庭には二本の大きな柿の木があった。

一本は甘い富有柿で今の季節になると早く食べたくて親に「取って取って」とせがむと親は「つくつく法師がまだまだ、♪渋いよ♪渋いよ」といつているからまだだめだね」といったものだ。

なる程、歌声の最終小節は「♪渋いよ」と聞こえる。「そうかまだ渋いのか」と子供心にも妙に納得したつけ。

もう一本は百^{ひゃく}匆^め柿という真正銘の渋柿で文字通り四〇〇^ぎ近い大きさであった。

晩秋になると先端をYの字に裂いた竹竿で丁寧に収穫しわらを敷いた木箱に並べ、それを何枚も重ねて納戸に収めておく。最先端の柿は高くて

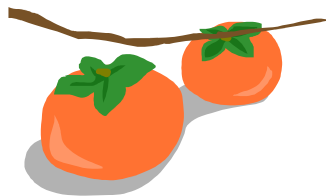
取れないので「小鳥にあげる」といつてどこの家でも二、三個は残しておく。冬枯れの畑

のてっぺんに赤い実を二、三個残した柿の木の風景も懐かしい。

寝かせておいた柿は真冬にはすっかり熟しトロトロに甘くなり炬燵に家族が集まってその冷たさにふるえながらも笑顔で食べる楽しみがあった。今、暖房の効く部屋でアイスクリームを食べる感覚か。

短い命を精一杯生きながら今日もつくつく法師が♪渋いよ」と歌っている。あの柿の木は今も実をたわわにつけ続けているのだろうか。

(根郷 中下 雪江)



初体験

カレッジのクラスメートHさんから「佐倉の秋祭りの山車、曳きたい？」と声がかかり、間髪を容れず「曳きたい！」：商談(?) 成立。友人たちに報告。「見て見て、約束よ」(イツヒビ、あの衣裳を身に着けていつもより高く髪をアップして、はちまきはこうして...)。初体験。「夢」を描く。

8月、高さ23歳、重さ19^トの天を突くような五所川原の立^{たち}俵^{ねぶた}武多を見た。威勢のいい囃子方の装束。腰にはきらびやかなポシエット。訊けば袋帯とのこと。(こんなのが着られるのかなあ。かっこいいなあ。作ってみようかな)。また、夢が膨らむ。

私の故郷の「港まつり」。市内の各所に舟形の舞台が設けられる。緞や紗の振袖に三尺帯を締め、ぽつくりと真新しい鼻緒をすげてもらい、舞

台の堤灯が点されるのが、今や遅しと玄関を出たり入ったり。わくわく、どきどき。今、幼心にも似た高揚感。どんどん夢が膨らんでいく。

しかし(この接続詞、嫌いだなあ) 10月、Hさんからのメール。「あの衣裳は町内会の人のみで、部外者はTシャツにハッピーでいいよ。ハッピーは貸すよ」ガン！ 百均で売ってるような祭半纏じゃ私には意味がない。「じゃ、止めます」。友人たちに「こうしようしかじかで」と連絡。長く伸ばしていた黒髪(白髪だらうって。おおきなお世話)もバツサリ切って。大きく、大きく膨らんだ夢がガラガラと音をたてて崩れ落ちた。ピュー。冷たい秋風が、私の心を通り抜けていった。

(白銀 松坂 みつえ)



12月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鍋木町198-3

URL http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

10月10日（金）からの3日間「佐倉の秋祭り」が行われ大変な賑わいであった。

佐倉に越してきた当時、お祭りは10月13～15日に実施され、その日が平日だと小学校の授業は午前中で終わっていた。娘達は大喜びで午後からのお祭りに参加した。幼児から長老まで一緒になって御神酒所を曳いて町内を廻り、6時の夕食後、小学生以下の子

供達は解散する。

中学生になると町名入りの祭半纏を着て、威勢の良い掛け声と踊りで盛り上がる大人の輪の中に入っていく、夕食後も終了時間まで一緒に踊っていた。見ていると、日頃のストレスを3日間で発散しているかのように思えた。

伝統ある「佐倉の秋祭り」に、町内会の一員として参加できるこの町に越してきたことを幸運に思っている。

（猪俣 民子）

あとがき

11月初めに2泊3日で東北地方へ紅葉めぐりに行ってきました。

このツアーは「一名一室同旅行代金」という事でしたので、初めて一人で旅行に行くことにしました。

総勢40名の内、個人参加は男性5～6人、女性7～8人。皆さんいつも一人で日本全国（時には海外も）旅行しているようです。

それにつけても女性はすごいと思っただけ、個人参加の人でも新幹線やバスの中で、隣同士の人とすぐ仲良くなっておしゃべりが始まることです。その点男性は駄目です、なかなか打ち解けません。

個人参加の80歳を超えていると思われればあざさん、あと一県で全国を制覇出来ると言っていました。

元気でいれば何でも出来る、という事ですか。

（島田 敏晃）